

Development 概念の転換

—支援の困難性の背後にあるものを探究する—

日 程：2014年3月4日（火）13：00～17：00

場 所：人文社会科学総合教育研究棟 W410 教室

開催にあたって

様々な人々を締め出す社会システムの周辺に広がる非制度的・非定型的な空間は、「生きづらさ」に満ちているとともに、それに向き合う教育実践に新たな質を要請しています。本シンポジウムの課題は、教育・福祉・労働・政治等の諸領域が交差する場でもあるこの空間に基盤を置きながら、新たな教育実践の特質の解明に挑戦することにあります。

教員はもとより子ども・若者の「自立支援」に携わる多くの専門職・支援者が直面している困難は、市場を志向する制度による制約のみならず、実現すべき価値をめぐる葛藤にも起因しているように思われます。そこで、今回はこれらの支援実践の根底に位置する価値である「発達」概念に焦点を合わせ、その理解をめぐる学際的な検討を試みることにしました。

第一部 『問題としての Development 概念』

■ 「年齢、獲得、定型 - 発達心理学における『発達』の前提となっているもの」川田 学

発達心理学の中でも、とりわけ乳幼児期を対象とした実証研究では、「年齢（月齢）」を独立変数として設定し、それによる測定指標のスコアから「獲得」された個体能力を査定し、年齢的な獲得能力の代表値から「定型」という人工的区分を割り出すという共通理解がある（定型というアイデアは比較的近年のものである）。その前提そのものをどう疑うかが1つの大きなイシューであるが、私の研究関心にひきつけると次の2点はこの前提問題と深くからんでいる。1つ目は、1960年代以降の「有能な乳児」というコンセプトに対する批判的吟味が必要であること、2つ目は、「定型」を設定しはじめたことにより、「定型」の内部での絶えざる差異化がドライブされ、そこから「定型」であることのハードルが吊り上っていくという現象が起こっているように見えることである。

■ 「子どものからだの変化から見えてくる“人間らしい”発達とは？」水野 眞佐夫

持続的発展可能な社会の実現は、個人の生存と行動の自由度を高めていく方向が求められるであろう。人類進歩の方向を保障していく課題は、第1級の問題として生・死に直面した「生存」、第2級の病気・けが等に関わる「保護」、第3級の“発育・発達上のゆがみや遅れ”に関わる「発達」の3つの局面から捉えることができる。子どものからだに現れたおかしさが実感されはじめたのは1960年代であり、この変化の方向は1980年代以降「日本の子どもたちの人間的危機」として警告されてきている。本報告が人類進歩の方向を見据えた“人間らしい”「発達」についての議論へ展開することを期待したい。

■「発展概念の転換と地域の思想」宮崎 隆志

1960年代から70年代にかけての開発主義は、それによって否定される地域が人間存在にとって有する価値を再考させ、地域の思想と呼び得る哲学を生み出したのみならず、その価値を実現する種々の教育運動を対抗的に発生させた。この報告では、北方性教育運動から農民大学運動に至る東北・北海道の経験をもとに、開発・発展・発達概念の実践的再定義の論理を検討したい。

■「現代の社会変動と Development 概念の変容

—マニラの経済開発と惨事便乗型資本主義— 石岡 丈昇

本報告は、Development（開発・発展）概念を、現代の社会変動を念頭に、主に社会学の視点から再検討するものである。その作業のために、本報告では現代マニラの貧困家屋の強制撤去の事例を取り上げる。マニラでは大量の強制撤去が生じているが、それらは、ビジネスセンターの開発など、都市・経済政策に沿っておこなわれる。その際に、今日では、従来のように警察と撤去部隊を動員してそれを遂行する手法と同時に、台風などの惨事に便乗してそれを実施する手法が見られるようになった。ナオミ・クラインの言う「惨事便乗型資本主義（disaster capitalism）」の典型例ともいえるこうした手法を跡づけながら、本報告では惨事を待望する国家と開発のありようを捉える。そこから、従来の国民統合を前提にした開発主義から、今日の階層分断を前提にした開発・発展への変化を議論し、その上で Development 概念の変容を捉えたい。

第二部 『発達と支援の再考』

■「抵抗としての発達支援」加藤 弘通

これまでの発達理論の多くは、「人がなぜ発達するのか？」を説明することをテーマとしてきた。つまり、その背後には「動かないものがなぜ動くのか？」という前提が隠れていた。しかし実際のところ、私たちは常に変化しており、むしろ発達の説明としては「変化し続けているものが、なぜ発達段階のようなあるまとまりを形成するのか？」、言い換えるなら「発達が滞るのか？」を説明すべきなのかもしれない。したがって、発達支援も発達を促進するものだけでなく、それ以外の可能性も考えていく必要があるだろう。

■「人間発達援助者の発達を考える——自己教育の観点から」間宮 正幸

わが国における臨床教育学は、「子ども理解を深め、子どもを支える新しい共同関係を探る」という研究の課題を掲げている。同時に、「発達援助専門職・教育職の専門性を問い直し、人々の生涯にわたる自己教育のための学問」であることをめざしている。私は、このシンポジウムでは、後者の柱の観点から、きびしい時代にある人間発達援助者自身の専門性を問い直し、自己教育の課題を考えたい。

■「特別支援教育の視点から」室橋 春光

障害のある子どもたちの発達の様相は様々である。超重度の障害のある子どもたちには、通常の意味での「発達」はないようにみえる。しかし時間はかかっても構造的変化が生じており、そこには環境からのはたらきかけがある。「発達障害」は、「発達」の「しそこない」のではなく、構造的変化の多様性を指し示すものである。当事者たちは、「障害者」としての自分の認知に揺れ動く。「発達」も「障害」も社会的基準に基づく概念であり、「支援」の困難性はそこから再検討することを求められる。

第三部 『総括討議』